

【情勢分析研究会報告】

製造業 revisited —自動車&工作機械—

大橋 英夫

中国経済経営学会の成立後初の情勢分析研究会（通算第17回）が下記の通り開催された。本稿では、その概要を報告することとする。

日 時：2015年3月14日（土）13:30～17:00

場 所：専修大学神田キャンパス

テーマ：「製造業 revisited —自動車&工作機械」

講 師：八杉理氏（トヨタモーターセールス & マーケティング）

「中国自動車市場の成長—日系ブランドを中心としたマーケティング課題」

広田紘一氏（千葉経済大学）

「モノづくりを支える工作機械の動向—生産，市場，技術」

参加者：24名

中国経済は成長方式の転換に邁進している。中国経済の構造転換に直面して、ビジネスの世界でも、中国経済の位置づけが「世界の工場」から「世界の市場」へと大きく変化を遂げつつある。実際に、外資の対中投資においても、2013年からはサービス業への投資が製造業への投資を上回る状況にある。消費・サービスが重

視されるなかで、中国ビジネスの焦点も B2B から B2C へと移行しつつある。これまで中国経済の高度成長を支えてきた製造業に関しても、新たな動きが生じつつある。

そこで今年度の情勢分析研究会では、まず、製造業の頂点に位置する自動車産業をテーマとして取り上げた。本学会においても、サプライチェーンの分析を中心に、自動車産業については数々の考察がなされてきた。しかし B2C ビジネスの時代を迎え、耐久消費財でもある自動車については、本格的なマーケティング戦略に取り組む段階を迎えている。同時に、中国経済は成長方式の一環として、戦略的新興産業の振興を打ち出すなど、高付加価値産業へのシフトを強めている。しかし人件費高騰・人手不足が「新たな常態」となっている中国では、産業構造、あるいはモノづくりのあり方を抜本的に転換する時期を迎えている。

以上のような問題意識から、今年度の情勢分析研究会では、二人の専門家を招き、製造業の焦点である自動車と工作機械の産業・市場動向を再考した。二人の講師には、研究会終了後にも、報告概要のチェックやメールでの質問にも対応していただいた。あらためて感謝したい。